MADE IN まちの主役 SHIMONOSEKI

写真家 野村佐紀子さん

野村佐紀子さんは、写真家の荒木経惟氏に師事し、人物や花、風景などをモノクロームで捉えた写真で、国内をはじめ、海外でも高く評価されてきました。故郷下関で初めての大規模な個展を開催する野村さんと、作品の魅力をお伝えします。

世の中の変化を写真に収め続けたい

カメラを持つことに呼吸が合って

大学の写真学科を卒業した野村さんは、思い描いていた写真家の道に進みます。

学生時代にゼミの先輩に勧められて撮り始め、今や野村さんの代名詞とも言えるのが、男性ヌード。緊張感や感情の揺らぎ、人と人との関係性が写し出される面白さに、今も追い続ける大切なテーマです。

最初は友人や知り合いに次々と声を掛け、モデルをしてもらいました。

中学生の頃からの友人の息子、中島諒太郎さんもその一人です。「生まれた時から知っていましたが、すごくかわいかったんです。脱いでくれませんでしたが(笑)」

▲モデルになった諒太郎さん(中央)と母の智恵さん(右)。結婚式の様子もカメラに収めました。

中島さんは「当時は恥ずかしかったのですが、自分のはがきが、パリやいろいろな展覧会で使われて、うれしかったです」と話してくれました。

これまで開催した展覧会は200回弱、発表した写真集はおよそ30冊になります。東京都写真美術館や英国のテート・モダンにも作品が所蔵され、高い評価を受けてきました。

「カメラを持つことに、自分の呼吸が合っていたのだと思います。何かを頑固に守って今があるのではなく、しなやかに流れに乗っているうちに今がある感じです」と野村さんは振り返ります。

海

2月11日から市立美術館で始まる特別展「野村佐紀子 写真展『海』」。タイトルには、綾羅木で育ち、大きな夕日を見ながら海に向かって帰宅していたという野村さんの原風景が重なっています。

Citizen's voice　まちかどボイス

新成人になった子どもへ

Editor's note　編集後記

■野村さんの写真を撮ることへの情熱、言葉を選びながらお話をされる様子に感銘を受けました。とてもカッコイイ方でした。廣野
■下関中等教育学校には新聞紙の匂い漂う学習スペースが。いつでも新聞が読める環境。学校も、学校奨励賞を受賞されていましたよ。宮村
■下関市公式インスタグラムでご紹介する写真は年々ハイレベルに!! 今年は私も「エモい下関」を撮って投稿します！東雲

①②③
© Sakiko Nomura

①「GO WEST」(2019年)より

②「nude/ a room /flowers」(2012年)より

③「nude/ a room /flowers」(2012年)より

▶東亜大学の大学院生が、野村さんの作品にインスピレーションを受けた映像作品を作成しました。学生にアドバイスをする野村さん(左)と、蒋宜彤さん(右)。「優しく教えていただき、いろいろな発想をもらいました」

「海」について、市立美術館の渡邉祐子学芸員が、解説してくれました。「海は、野村さんの写真の世界を言い表す象徴的な存在です。モノクロームによる表現は、淡い光が照らし出す静かな海底を思わせます。海は、静かだけれども激しい、繊細でありながら力強いといった野村さんの写真に潜む魅力に通じます」

特別展では、野村さんが30年以上前から撮り続けた下関の写真も展示します。「私の撮った写真でも、他の方が見ているうちに、ハッとご自身の記憶とつながることがあります。皆さんに写真を見ていただき、何か感じていただけるとうれしく思います」と野村さんは、話します。

写真とは

いつもカメラを持ち歩いている野村さんにとって、写真とは何でしょうか。「今ある関係を正しく記録するのが写真で、被写体と写真家の関係性も写真に表現されています。人と人との微妙な雰囲気を撮りたいと思っています。そして、世の中が変わる様子を撮り続けたいです」

野村さんの代表作が紹介される特別展は、3月27日まで。世界を舞台に活躍を続ける野村さんの写真に、ぜひ向き合ってみてください。